



貨幣とは何か

貨幣なしでは近代経済はまわらない

Irena Asmundson、Ceyda Oner

歌にもあるように、貨幣が世界を動かしているのかもしれない。そして恐らく世界の大部分の人が貨幣を扱ったことがあり、多くの人にとっては日常的なことだろう。だが、それだけ親しまれているにもかかわらず、貨幣とは一体何なのか、貨幣の仕組みはどうなっているのか、正確に理解している人はほとんどいない。

手短かに言えば、この3つの働きがあれば、何でも貨幣になる。

- ・ 価値の貯蔵。取っておいて、後で使える。支払いを長期間にわたって平準化できる。
- ・ 価値の尺度。すなわち、価格のための共通の基盤となる。
- ・ 流通の手段。人々がお互いに売買するために使用できる。

たぶん、貨幣の役割を知る一番簡単な方法は、貨幣が存在しなかった場合には何がかわるかを考えることだろう。

貨幣が存在しなかったら、我々は物々交換経済の世界に戻ってしまうだろう。ある人がほしいものは全部、その人が持っている何かと交換でなければ手に入らない。たとえば、車の修理の専門家が、食料を手に入れたいとしたら、修理工は壊れた車を持っている農夫を見つけなくてはいけない。だが、農夫に修理してもらいたいものが何も無い場合はどうなるだろう。または、農夫が修理工に渡せるのは、食べきれない量の卵だけだった場合はどうすればいいのか。条件の合った交換相手を見つけ出さなければならないので、特定のものに関する交換は、とても難しくなる。人々は、物々交換できる相手を見つけ出す前に飢え死にしてしまうかもしれない。

だが貨幣があれば、条件の合った相手を見つけ出す必要はない。必要なのは、自分の商品かサービスを売る市場だけだ。その市場で、個々の商品と物々交換をする必要はない。その代わりに、商品かサービスは共通の交換媒体、すなわち貨幣と交換する。そしてその貨幣を使って、

やはり同じ交換媒体を受け取る他の人から、必要な物を買うことができる。特定の者の生産に専門化するにつれ、生産量を増やすのが簡単になり、すると取引に対する需要が高まって、貨幣に対する需要もますます増加する。

様々な貨幣

視点を変えると、貨幣は長い間価値を保ち、簡単に価格に変換でき、広く受け入れられる存在だ。昔から様々な物が貨幣として使われてきた。たとえば、タカラガイの貝殻、オオムギ、コショウの実、金、銀などだ。

当初の貨幣の価値のよりどころは、他のことにも使えるが、そうするためにはコストがかかるということだった。たとえば、オオムギは食べられるし、コショウの実も食べ物に風味を付けられる。こういった消費に対して与えられる価値は、価値の下限を決める。だれもが栽培できるが、そうするには時間がかかり、よってオオムギが食べられてしまうと、貨幣の供給が減少する。一方、たくさんの方がイチゴを欲しがり、喜んでイチゴと交換するかもしれない。だが、イチゴは貨幣としては質が悪い。腐りやすいからだ。イチゴを貯めておいて翌月に使うのは難しい。もちろん翌年に使うのは無理だ。そして、遠隔地の人と取引することはほとんど不可能だ。また、分割の問題もある。価値のあるすべての物が簡単に分割できるわけではないし、その一つ一つを同じ大きさにするのは大変だ。たとえば、一籠のイチゴの価値を、他のものすべてに対してどのぐらいの価値があるのかを、いちいち定めて一定に保つのは簡単ではない。貨幣として適さないのはイチゴだけではなく、大部分のものが適さない。

だが、貴金属は、安定した計算単位、耐久性のある価値の保持、そして便利な交換媒体という3つのニーズに応えるようだ。貴金属は手に入れるのが難しい。世界全体でも供給量が限られている。耐久性もある。コインという一定した大きさに簡単に分割できて、小さな単位にしても価値を失わない。要するに、耐久性、供給の限定性、高い代替コストおよび運搬性によって、貴金属は他の物と比べて、貨幣として魅力的なのだ。

最近までは、金と銀が主要な通貨だった。だが、金と銀は重い。長年のうちに、人々は、金属を実際に持ち運んで品物と交換するよりも、貴金属を銀行に預けて、預けた金や銀の所有権保証書を使って交換する方が便利だと気付いた。保証書を持っている人は誰でも、銀行へ行ってそこに書いてある額の貴金属を受け取ることができた。最終的には、貴金属に対する保証書は、貴金属から切り離された。この兌換性が失われた時に、法定不換紙幣が誕生したのだ。法定不換紙幣はモノとしてはまったく価値がないが、国家が紙幣に価値を認めているというだけで、価値があることになっている。要するに、貨幣はみんなが機能すると信じているから機能するのだ。交換の手段が、物々交換、オオムギや貝殻と発達していくにつれ、貨幣を保証するのも個人から集団、そし



て近年には政府と変わっていった。

標準化されたコインや紙幣の使用によって、モノやサービスの価格を決めるのが簡単になったが、システム全体の中の貨幣の量も、価格を決めるのに重要な役割を果たした。たとえば、小麦農家には貨幣を持つ理由が少なくとも2つある。ひとつは取引に使用するため(キャッシュ・イン・アドバンス)もうひとつは、将来の必要のための貯金だ。冬が近づいて、農家が将来の支出を予想して貨幣の貯蔵を増やしたいとする。その農家が貨幣を持っていて、かつ小麦を買い手がなかなか

要するに、貨幣はみんなが機能すると信じているから機能するのだ。

見つからない場合、農家は穀物と交換で少ないコインまたは紙幣と交換することになるかもしれない。つまり、貨幣の供給が逼迫し過ぎているので、小麦の価格は低下する。ひとつの理由としては、単に新しく貨幣を铸造するためには金の量が十分ではないのかもしれない。価格全体が下落した場合、それはデフレーションと呼ばれる。一方、流通している貨幣の量が増えたがモノに対する需要の水準が変わらない場合、貨幣の価値は下落する。これはインフレーションであり、同じ量のモノやサービスを手に入れるために必要な貨幣は増加する(F&Dの2010年3月号の「インフレーションとはなにか」(What Is Inflation?)を参照)。貨幣の需要と供給の均衡を維持することは悩ましい問題だ。

貨幣はどのように測定されるか

公式統計において、経済における貨幣の量は一般にいわゆる広義の貨幣で測定され、これには価値の保蔵と流動性を提供するすべてのものが含まれている。流動性とは、金融資産がすぐさま完全な市場価格に近い価格で売却できる程度である。すなわち、金融資産は容易に現金などの他の形態の貨幣に転換することができる。現金と譲渡性預金(狭義の貨幣)はすべての国で広義の貨幣に含まれているが、広義の貨幣とみなされるためにやはり十分な価値の保蔵と流動性を提供する他の構成要素もある。IMF(2000年)は以下を広義の貨幣としてみなされる例としている。

国の通貨(通常、中央政府により発行される)

譲渡性預金。要求払い預金(小切手または為替によって譲渡可能である)、銀行小切手(交換媒体として使用された場合)、旅行小切手(居住者との取引に使用された場合)、およびそれ以外の一般に支払いに利用される預金(一部の外貨預金など)を含む。

その他の預金。譲渡不可能貯蓄預金、定期預金(固定期間預金される資金)、または買戻契約(一方の当事者が有価証券を売却し、固定価格で買い戻すことに同意する契約)等。

株式以外の有価証券。譲渡性預金証書、コマーシャル・ペーパー(基本的に企業の借用証書)等。

貨幣の製造

法定不換紙幣は、貴金属よりも使い勝手がいい。供給の調整は、流通している貴金属の量に左右されない。しかし、このことが法定不換紙幣の複雑さを増す。貴金属の量は有限だからこそ、発行できる紙幣の量には上限がある。金も銀も貨幣を裏付けていないとすれば、政府はどうやって、どれだけ紙幣を印刷すればいいのかわかるのだろうか。これは政府が直面するジレンマとなる。一方で、当局は常に貨幣を発行する誘惑に駆られる。政府はそれで調達を増加させ、雇用を増加させ、賃金支払いを増加させ、人気を高めることができるからだ。さらにもう一方で、貨幣を発行しすぎると、物価を上昇させるという問題がある。物価がこの先引き続き上昇するとみんなが見込み始めると、人々は自分の価格をさらに大幅に引き上げる。政府がこうした期待を抑制するために手を打たなければ、貨幣に対する信頼は損なわれ、最終的には無価値なものになる可能性もある。これが超インフレ時に起きることだ。紙幣を印刷する誘惑を否応なしに断ち切るために、今日多くの国では、紙幣をどれだけ印刷するかを決める役割を、独立した中央銀行に委任していて、中央銀行は自国経済の必要性の評価に基づいて決定する責任を負い、政府支出の資金を賄うために資金を政府に移転することはない(F&Dの2009年9月号の「金融政策とはなにか」(“What Is Monetary Policy?”)を参照)。「紙幣を印刷する」という用語は、それ自体が誤った呼び方だ。今日、多くの貨幣は紙幣ではなく銀行預金の形で発行されている(囲み記事参照)。

信頼は薄れることがある

高インフレへの道をたどった経験のある国は、貨幣の価値が、基本的に人々のその価値に対する信頼に頼っていることを自分の目で確認してきた。1980年代に、アルゼンチン、ブラジルなど一部の中南米諸国の国民は、インフレーションが通貨の価値を非常に急に損なっていたため、徐々に通貨に対する信頼を失っていった。こうした国の国民は、もっと安定した通貨である米ドルを事実上の通貨として使い始めた。この現象は、「非公式または事実上のドル化」と呼ばれる。政府は、独占的に貨幣を発行する地位を失い、そしてドル化は反転させることが非常に難しい。

通貨への信認を回復するために政府が実施した一部の政策は、貨幣の機能の「信頼」部分を見事に浮き彫りにしている。たとえば、トルコ政府は2005年にその通貨であるリラについて100万分の1のデノミを行った。100万リラは一夜にして1リラとなった。一方、ブラジルは1994年に新通貨リアルを導入した。両方の国で国民は賛同し、今までと違った単位、または新通貨が基準であることを誰もが受け入れる限り、単純にその通りとなることを証明した。貨幣として受け入れられれば、それは貨幣なのだ。 ■

イレーナ・アスムンドソンおよびセイダ・オナー(Irena Asmundson and Ceyda Oner)はIMFのストラテジー・ポリシー・アンド・レビュー・部門のエコノミスト。

参考文献:

International Monetary Fund (IMF), 2000, Monetary and Financial Statistics Manual (Washington).